

『まぼろしの魚は生きていた』

中坊

徹次

序論（問題提起）

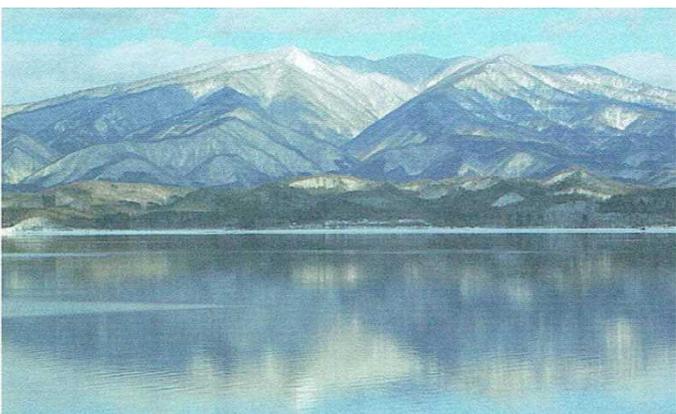
クニマスは、サケの仲間で、秋田県の田沢湖だけに生息していたが、一九四〇年頃に姿を消した。二〇一〇年一二月のニュースで「絶滅したはずのクニマスが生きていた。」と報じられる。

・問題提起 1

クニマスはなぜ田沢湖で絶滅したのだらう。

・問題提起 2

絶滅したと思われていたクニマスが、なぜ遠く離れた西湖で生きていたのだらう。



本論

・本論 1 田沢湖での絶滅（問題提起 1 の答え）

一九三四年の東北地方の大凶作により、農業用水の確保と電力供給を増やすために、酸性の強い玉川の水を田沢湖に引き入れた。

↓環境の改変によって、クニマスをはじめとする

多くの生物が姿を消し、クニマスを巡る文化も消えた。

・本論2 西湖での生存（問題提起2の答・発見の経緯）

・クニマスの卵が、絶滅前の一九三五年に山梨の西湖と本栖湖、一九三九年に滋賀県の琵琶湖に譲渡されたという記録が見つかる。

↓一九九〇年代、田沢湖周辺に住む人々が中心になって、クニマス探しの運動が起こった。このときは↓結局見つからなかったが、クニマスは田沢湖固有の黒い体色をした「幻の魚」として、広く知られるようになった。

・二〇一〇年三月、筆者の研究室に山梨県西湖でとれたという黒いマスが届けられる。西湖にはクニマスによく似たヒメマスという魚がいる。

↓捕れたときの状況を調べる。

・産卵時期と場所が、クニマスとほぼ一致する。

・えらと消化器官に、クニマスだけに見られる特徴があることがわかった。

・遺伝子の解析を行い、黒いマスはヒメマスとは別の魚であることがわかった。

↓この黒いマスはクニマスであった。

・深い田沢湖の環境に合わせて生きていたクニマスが、どうして浅い西湖で命をつないでいけたのだろうか。
↓田沢湖も西湖も、クニマスの産卵場所の周囲の水温は、四度だった。移植先の西湖は、クニマスが産卵して生存できる条件を備えていた。

こうした偶然の一致により、クニマスは西湖で命をつないでいた。

結論（筆者の主張・まとめ）

・西湖でクニマスがこれからも生き続けるためには、どうすればよいのだろうか。

↓産卵場所も含めた湖全体の環境を守ること

↓かつての田沢湖のように、人と生き物とがつながり合った関係を維持すること

田沢湖のクニマスの絶滅は、一つの種の損失と異なただけでなく、そこに暮らす人々の生活や文化に影響をあたえてしまうことでもあった。

環境を変えてしまうのは一瞬。だが、それ元にもどすには、気の遠くなるような時間と労力が必要である。

